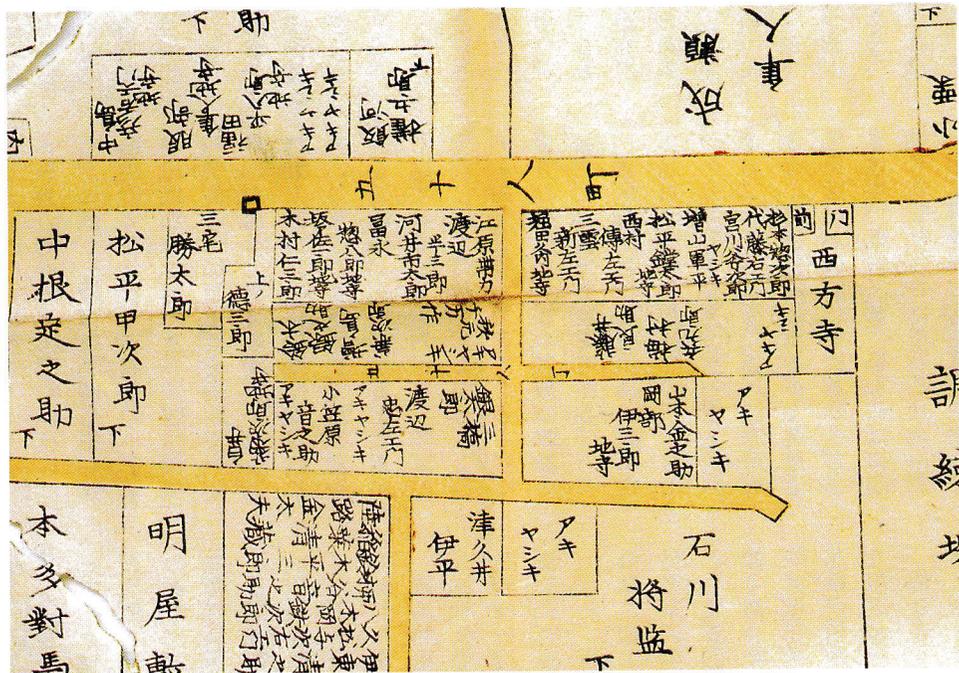


明治史料館通信

2007.7.25 (季刊 年4回発行) Vol. 23 No. 2 通巻第90号



嘉永4年 江戸切絵図「内藤新宿新屋敷辺之図」に描かれた五十人町
(大川通久関係資料)

素六の父「江原帯刀」と祖父(母の父)「秋元千万作」の名前が記載されている。現在のJR新宿駅東口あたり。

江原素六とその周辺(45)

江原素六は御家人ではなく旗本の出身

江戸幕府・徳川將軍家の家臣団は、万石未満で御目見え以上の家格を持つ旗本と、御目見え以下の御家人とに分かれた。身分制社会において、その違いは大きく、旗本と御家人の間には、経済的・社会的な格差が存在した。

往々にして偉人の伝記では、凡人には容易に越えられない壁を努力と才能によって越えたことが称揚される。江原素六伝でも、身分が低く貧しい家に生まれながら、必死に勉学に励み、立身していったことが必ず言及される。

しかし、そのサクセス・ストーリーには混乱がある。特に江原家の遠祖が黒鍬者という卑賤な地位にあったことから、同家が微禄の御家人であったと決めつけられてしまっているのは、大きな誤りである。この錯誤は、実は沼津市明治史料館が編集・刊行した『江原素六生誕百五十年記念誌』(一九九二年、三二頁)の叙述に明確に表れてしまった。江原家を「微賤な御家人」であるとする誤りは、近年の刊行物(川又一英『麻布中学校と江原素六』、二〇〇三年、新潮社)にも踏襲されてしまっている。

江原家の家系については、『江原素六先生伝』(一九二三年)に掲載された由緒書からも明らかである。すなわち、初代の覚左衛門は確かに黒鍬之者

であったが、その後定普請同心となり、以後、二代目以降は黒鍬之者をつとめることはなく、定普請同心小頭、御作事方勘定役といった役職に就き、特に六代目源五郎は御大工頭・御壘奉行・御裏門切手番之頭を歴任し、文化二年（一八〇五）には「永々御目見以上」とされたのである。つまり、六代目の時、江原家は子孫に至るまで御目見以上であるという資格を与えられ、晴れて旗本となったのである。

また、新聞記事で報道された江原の履歴にも、「君の家は幕府の拝謁以上にして格式卑しからざるも俸禄薄く頗る貧困」（『静岡大務新聞』明治23年7月5日）とあるように、貧乏ではあったが、拝謁以上の家格、つまり旗本であったと明記されているのである。

素六の父源吾（帯刀）は、旗本小野家から養子に來た人である。小野家と江原家とは禄高もそれほど違いのない同格の家だった。ただし、源吾の兄小野鼎之助は、役職に就いていたので、足高（本高

が役高に達しない場合に在職中に給される差額）を支給され、本高と合わせ二〇〇俵であった。

素六の幼少時、江原家が貧しかったのは、七代目以降の当主が役職に就くことなく、無役の小普請支配になっていたため、四〇俵の禄米のみに頼る生活を送っていたからである。下層の旗本と上層の御家人とは、生活レベルにおいて大いに重なる部分があったことも確かである。江原家が貧乏旗本から脱するのは、素六が幕府陸軍の士官として頭角を表すことによつてであり、能力主義による人材採用方針に乗った彼の努力の賜物であることもまた事実である。

執筆を担当した前掲『江原素六生誕百五十年記念誌』の誤りをこの小文で訂正させていただきたい。なお、近年の研究では、江原家のように御家人から旗本へと身分上昇を遂げた家は、全旗本のうち、寛政期では約二割、幕末には約四割に達したとされている（小川恭一『徳川幕府の昇進制度』（二〇〇六年、岩田書院）。

（樋口雄彦）

シリーズ
沼津兵学校とその人材

81

大奥に仕えた祖母を持つ関戸孝

江戸幕府の長い歴史の中には、五代將軍綱吉とその側近柳沢吉保の例を出すまでもなく、大奥に身内を送り込み、將軍の姻戚となることで権勢を誇った人物が何人もいる。大奥が徳川家の単なるプライベート空間ではなく、政治勢力であったことは言うまでもない。

政治的権力というほど大袈裟なことでもなくとも、大奥に何らかの関わりを持つことは、社会的・経済的に有利に作用し、家運を盛り上げた。たとえば、江原素六の大伯母・願生院（下山氏）は十一代將軍家斉の大奥につとめ、終身禄として五〇〇俵を賜り隠退した尼僧であったが、彼女のもとに給仕のアルバイトに行くことによつて江原少年は貧しい家計を助けたのである（『江原素六先生伝』）。

父千秋（八十吾）ら家族とともに遠州新居宿近くの浜名郡中之郷村に移住し、単身沼津兵学校に來学した。嘉永元年（一八四八）八月一六日の生まれなので、二十代前半の青年だった。明治五年の廢校に際し教導団に編入された六三名の一人である。孝は同家の八代目にあたるが、御徒をつとめた家だったようだ。決して高い身分ではない。父は御徒目付をつとめたほか、江川太郎左衛門の大小砲習練場で高島流砲術を学んでいる。

似たような事例を沼津兵学校関係人物の中からあげてみよう。

第九期資業生に關戸孝（旧名鏡橋）という人物がいた。維新時には

この戒法尼は、関戸家にとつては「中興の祖」とされ、言い伝え

戦後撤去され現存しない。



警察官の制服を着た関戸孝
(関戸孝則氏所蔵)

では、中臈だったという。実家に対し経済的に大いに貢献したものと考えられる。ただし、裏付けとなる史料で見付けることができたのは以下のもののみである。

元御右筆

一 御合力金式拾五兩 よ津

一 三人扶持 宿関戸平八郎

所下谷御徒町

これは、「嘉永七寅年八月改大奥女中分限帳并剃髮女中名前」

(埼玉県立文書館・旗本稻生家文書)という、十三代將軍家定の大奥に仕えた女中の名簿の記載である。現役ではなく、「隠居女中」という項目に含まれる。

戒法尼の本名が「よ津」であるという証拠は他にないので断定はできない。しかし、父なのか兄なのか不明であるが、宿(実家・身元保証人)として記された「関戸平八郎」が決め手となる。菩提寺

の過去帳には、そのものズバリ「平八郎」はないものの、平四郎・平二郎・平治郎といった関戸姓の名前があり、「八」が「次」の誤りだと考えれば、「よ津」が同家の人であることは間違いないだろう。ただし、彼女は中臈ではなく右筆であった。よ津と戒法尼が同一人物だとすれば、嘉永七年当時は五八歳だったことになる。

関戸家の過去帳では、五代目佐久左衛門則久は嘉永三年(一八五〇)に、六代目礎太郎則文は嘉永四年に没している。そうすると、平次(八?)郎とは千秋その人のことかもしれない。

幕府崩壊は大奥にもリストラもたらした。多くの奥女中が解雇され、徳川家の奥組織は最低限の規模に縮小され静岡へ移った。関戸戒法尼が家族とともに遠州へ移住したのか、それとも東京に留まったのかは不明である。

ところで、関戸孝のその後である。厳しい兵営生活に嫌気がさして辞めていく仲間が多かったが、関戸は暫くの間は教導団に残った。当時の史料として以下の文書が残

されている。祖母戒法尼が亡くなった少し後のことである。

関戸孝犯罪処分之儀ニ付伺
肆第二千三百六十九号 関戸孝
犯罪処分之儀、別紙判決書ヲ以
相伺候也

明治九年十月九日

裁判長黒川通軌

陸軍卿代理

陸軍少輔大山巖殿

伺之通 十月十四日

元教導団工兵第一大隊付

当今工兵第一方面付

謹慎一週間 陸軍曹長関戸孝

右恐入書之趣、管領スル所ノ(ボアットコンパスマイシヨール)一個(ブーソルアパン

ス)二個ヲ紛失ス、軍律増加条例第七条ニ依リ判決如右

但紛失スル物品償還セシム

明治九年十月二日

陸軍裁判長黒川通軌

同 権評事伏谷惇

同 七等出仕阪元純源

日記 学校教導団裁判所 十日金 陸軍省第一局)

官給品を紛失し処罰されたという記録である。その後、除隊したらしく、明治三二年(一八八九)頃には広島県の官吏となり、広島警察署詰の警部補になっていた。

孝は長命で、昭和三年(一九二八)一月二日に亡くなっている。息子の豊も警察畑を歩み、東京で署長をつとめたという。

関戸家の本籍は現在も新居町にあり、同町の東福寺には移住先で亡くなった孝の弟の墓石が残る。

(参考)「関戸家代々之過去帳」(関戸孝則氏所蔵)、「士族関戸家之家系」(関戸千代筆)、天然寺過去帳および同寺住職より聞き書き、『明治初期静岡県史料』第四卷(一九七〇年)、『新居町史』第九卷(一九八四年)、『広島県職員録』(一八九〇年、早速社)、『職員録』(一八九〇年、印刷局)、長野ひろ子『日本近世ジェンダー論』(二〇〇三年、吉川弘文館)、松尾美恵子『女中分限帳』が語る大奥(『歴史読本』第43巻第6号、一九九八年)

(防衛省防衛研究所所蔵「大樋口雄彦」)

お知らせ欄

◎アノ頃キミハ若カッタ!?

「昭和の沼津 写真展」の開催

ちよつと懐かしい昭和の沼津の写真を紹介しています。

会期 7月7日(土)〜8月26日(日)

※会期中、常設展の沼津兵学校コーナーは縮小しています。

◎「そろくまつり」実施結果

江原素六の命日である5月19日(土)に「そろくまつり」を開催しました。例年、命日には無料開放日として開館してきたところですが、今年度から、当日に様々な催しを行い、当館の主要テーマのひとつ



「子どもたちのみた江原素六」展示風景
(当館3階展示室江原素六コーナー)

で、館の副称にもなっている江原素六についてより広く知ってもらうことを目的に開催したものです。

当日は、早朝の荒天で天候が心配されましたが、なんとか回復し、700名を超える方が来館されました。ありがとうございます。

また、社団法人江原素六先生顕彰会々々長始め役員・会員の方々、力作をお貸し下さった金岡・沢田・門池・愛鷹各小学校の先生・生徒の皆様、貴重な資料をお貸し下さった山本様、その他多くの方々、多大なるご協力を頂きました。ありがとうございます。

〈実施した催事〉

■上映会「沼津兵学校」

昭和15年作品 監督今井正

■特別展示「子どもたちの見た江原素六」

金岡・沢田・門池・愛鷹の各小学校で実施されている江原素六学習の成果である生徒の作品を展示。

■特別展示「山本家資料の公開」

江原素六の推挙で明治三十二年(一八九九)金岡尋常小学校長に就任した山本喜三の家に伝

わる、「山本勲助」のものとして伝えられる「旗指物」などの資料を公開。

■もちつき、無料配布

■日吉太鼓演奏

■開催挨拶 沼津市長・江原素六先生顕彰会長

◎夏休み企画のお知らせ

〈戦争史跡めぐり〉

市内に残る戦争の跡を見学して、「戦争」と「平和」について考えます。

8月7日(火) 対象 中学生

8月11日(土) 対象 親子

〈戦時中の暮らしを体験しよう〉
戦時中の体験談を聞いたり、すいとんを作って食べたりします。

対象 小学4〜6年生

8月9日(日)

〈一日学芸員体験講座〉
学芸員ってなに? どんな仕事をするの? 普段馴染みのない学芸員の仕事を体験します。

対象 高校生

8月8日(日)

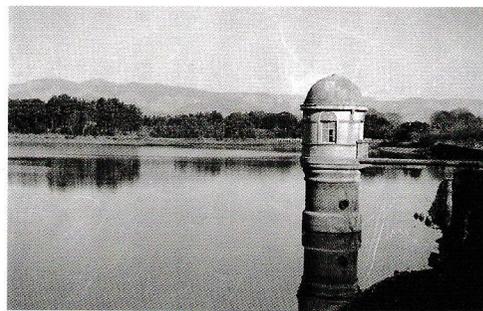
※お申込み受付中。お申込、問い合わせは当館までどうぞ。

◎19年度第1回企画展

「牧堰・門池用水と水の恵みと人々のくらし」の開催

江戸時代初期に開削された牧堰・門池用水の沿革と、そこに関わった人々の暮らしに関する資料を紹介します。

会期 9月22日(土)〜11月25日(日)
会場 当館3階展示室



昭和26年(1951)頃の門池
(秋元時男氏寄贈)

沼津市明治史料館通信 第90号

編集 沼津市明治史料館
発行

〒410-0051 沼津市西熊堂三七二-1
電話 〇五五-九二一-三三三五
FAX 〇五五-九二五-三〇一八
http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kuwashu/sisetsu/meiji/index.htm